THE JAPAN AGRICULTURAL NEWS
日本農業新聞
発行所　日本農業新聞
〒110-8722東京都台東区秋葉原2番3号
©日本農業新聞2016
2016年（平成28年）
2 28
日曜日

書評

農林中金総合研究所特任研究員
行友弥

## 学校蔵の特別授業

尾畑留美子・著

# 示唆に富み刺激的な提言

◇出版＝日経ＢＰ社
◇価格＝1600円
◇副題＝佐渡から考える島国ニッポンの未来

著者は新潟県佐渡市（旧真野町）の酒造会社尾畑酒造の専務で、5代目蔵元。大学卒業後、東京の大手映画配給会社に就職したが1995年に郷里に戻り、家業の酒造りを継いだ。国内消費の低迷にあえぐ日本酒の、新たな市場を求め、試行錯誤を重ねて海外輸出に道筋を付けるなど、経営改革に手腕を発揮した。

「学校蔵」とは、廃校になった小学校の校舎を醸造所に変え、さらには学びと交流、再生可能エネルギー利用（太陽光発電）の場とするプロジェクト。「日本で一番夕日が美しい小学校」として地元の誇りだった旧西三川小を舞台に、2014年8月と15年6月に行われた「特別授業」の記録だ。

本書に登場する講師は『デフレの正体』などの著書で知られる藻谷浩介・日本総合研究所主席研究員ら3人。過疎と高齢化に悩む佐渡島は日本社会の「課題先進地」といえるが、絶滅寸前に追い込まれたトキがよみがえったように、発想を変えれば地方は課題解決の先進地にもなれると藻谷氏は説く。出生率回復へ向けた「子ども基準」の導入や「東京をゴールとしない」などがキーワードだ。

その土地の魅力を互いに競う「魅力発信モデル」より、同じ課題を共有する他地域とつながり合う「課題共有モデル」、業種や地域を超えた「緩やかな絆」（ウイーク・タイズ）の構築など、他の講師2人による提言もそれぞれに示唆に富み、刺激的である。

授業を受けたのは地元高校生を含む老若男女。約80人のグループセッション（自由討論）では次々と手が上がり、地域の抱える課題とその解決策について熱心な発言が相次いだという。「地方消滅」の予言におびえ、お仕着せの「地方創生」に踊る前に、ぜひ一読したい一冊だ。